

コタンの口笛

第 2 部

石 森 延 男



旺文社文庫

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値あるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

あらい好夫

〔編集顧問〕 小田切進 茅 誠司 木村 毅
中島健蔵 森戸辰男 (五十音順)

旺文社文庫

コタンの口笛
(第二部)

340 円



昭和50年2月15日 初版発行
昭和53年第2刷発行
著者 石 森 延 男
発行 鳥 居 正 博
印刷所 旺文社 日新印刷株式会社

発行所 株式会社 旺 文 社

162 東京都新宿区横寺町

電話 (編集) 03-266-6372, (販売) 03-266-6415

0193 | 611-53 | 0724

808112

© 旺文社 1975

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

Printed in Japan

(中村印刷・西林製本)

製本上の不良品は本社に直接お申し出ください

旺文社文庫

コタンの口笛

第二部 光の歌

石森 延男 著

目 次

一	カラマツ林	九
二	夜 明 け	二六
三	エカシとオヤジ	三八
四	カシワの木	五五
五	ばら色の夕やけ	七二
六	雪 あ かり	八八
七	初 ふ ぶ き	一〇四
八	新 し い 日	一二九
九	犬 の けん か	一三三
一〇	マ リ モ	一四四
一一	すてた花たば	一五六
一二	ゴ ム 消 し	一七〇

一三	弓折れ月	一八五
一四	雪の顔型	二〇三
一五	送別音楽会	二一七
一六	クリスマス	二三三
一七	おふろ	二四七
一八	木彫り	二五六
一九	心のあらし	二七二
二〇	二つの握手	二八六
二一	いやです	三〇六
二二	火事	三二二
二三	ベニヒワ	三三三
二四	青いカーテン	三四八
二五	堅雪渡り	三六五
二六	クナウ・ノンノ	三八四

二七	腕 時 計	……………	四〇一
二八	卒 業 の 日	……………	四二四
二九	白 い 直 球	……………	四三九
三〇	光 の 中 を	……………	四四五
解 説	武田友寿	……………	四五五
代表作品解題		……………	四六七
素朴なるものの美しさ	花岡大学	……………	四七〇
年 譜		……………	四七六

(挿絵 四辻一郎)

この物語を

恩師 矢沢邦彦先生と

長女「のみち」の霊に

ささげます。

コタンの口笛 第二部 光の歌

アイヌの祈り歌 (sinoxcha)

sake kara-an te	おさけをつくって
kamuy onne	神さまたちへ
an-e-inomi	お祈りします
tani orowa	今からのち
echiokay patex	あなたばかりが
echi-sikopa-(y)an	わたしたちのたよりですから
pirikaha-no	よくよく
i-nukara yan	わたしたちをおまもりください
hempara kanne	いつの日も
i-nukara yan te	わたしたちをおまもり
i-konte yan	くださいませ

一 カラマツ林

ユタカが家に帰ってみると、イヨンはまだもどっていませんでした。電燈の下の机で、マサがなにかしきりに書いているところでした。

「なにを書いているの。手紙？」

「いや。」

「日記？」

「いや。いつか、イカンテばあちゃんから聞いたお話さ——。」

「ああ、カツラの葉っぱが、カジカになった話？」

「そう。あれをおとぎ話ふうに書いてるの。いま、学校の雑誌で、原稿を募集してるから。」

「さし絵もかいたら？ お得意の——。」

「カツラの葉っぱ。あのかわいい、まるっこい葉っぱがね。川の水にぶくんとおちるのさ。すると、それを見つけたイワナが、氣どってよってくるの、たべるものかと思ってね。そのあとから、おしゃれのヤマベも出てくるの。そこへウグイもくるの、食いしんぼうのね。すると、葉っぱが、たちまちカジカになるのさ——。」

「ちよっとひにくだね。おしゃれさんたちの前に、あのみっともない、どろくさい、おどけたカ

ジカが、ひょこんと出現するなんて——。」

「つんとすました、おしゃれさんたちがね、カジカを見て、いろいろなことをいうの。なにさま、いままで見たことも聞いたこともないような、へんなものだから、

『あれは、サンショウウオの孫ですわよ。』

って、イワナがいうし、ヤマベは、

『あれは、オタマジャクシのボスだ。』

と、知ったかぶりをいうし、

『ちがうよ。あいつは、オケラのばけものだ。』

って、ウグイがおどかすの。」

「カジカは、ちょっと、さかなとは見えないからね。色は黒いし、口は耳までさけてるし——。」

「そうさ。そんなこといわれても、カジカは、いっこうにさからわないで平気さ。そうして、川底の砂にぺたっと腹をくっつけて、目玉ばかり、ぎょろん、ぎょろん、光らせているの。それを見て、おしゃれさんたちは、

『あれは、石ころのいとかかもしれない。』

っていったりするの。だって、そんなまね、おしゃれさんたちにはできないからね。そこへ、また、カツラの葉っぱが、ぽらりと一枚、散ってくるのさ。そうして、第二のカジカが生まれるの。カジカたちが話をはじめの。高い、高い、木の上でくらしってきた思い出話をね。たのしいロマンスをね。この思い出をもっているから、水の中のくらしもよくわかるってね。」

（姉なればこそ、こんなにうちとけて語ってくれるんだ。どこのだれが、いったい、ぼくに話なんかしてくれる？　今夜かぎり、ぼくがいなくなったら、ねえさんは、さびしくなるだろうな。ねえさん。わがままを許して。）

「とうさん、やっぱり、今夜もおそいらしいから、さきにご飯にしよう。」

マサは、書きかけの原稿「カツラの葉っぱがカジカになった話」をやめて、カチャンカチャン、ちやわんをテーブルに運びました。そのあいだにユタカは、ニワトリ小屋のかげに行つて、トリカブトの根を石の上にのせて、すりつぶしてねりました。べつとりと、マキリ（小刀）の刃にぬりつけ、そうっとさやにおさめ、例のうらみの紙に包み、ズボンのポケットにしのばせました。

「ユタカ、ご飯だよ。」

（あの声になつかしい。かあさん代りをしてくれて、これまでに大きくしてくれたねえさんのあの声。ねえさんと、わかれたくない。この世では、ぼくをそだててくれる人は、ねえさんのほかにだあれもないんだから。やさしいねえさん、きれいなねえさん。）

「ご飯だってば。」

「すぐ行くよ。」

ユタカは、川の水で両手をゴシゴシ洗いました。泥をつけては、毒気を洗いおとしました。食卓につくと、おかずは、干しイワシとそれに野菜のごた煮でした。

「イワシは、おしゃれさかない？」

「ちがうわ。」

「ドジョウも登場するかい？」

「ドジョウは出てこないけど、セキレイが出てくるわ。あれは、空の話をよく知ってるだろう？それに川のそばがすきだから。」

「セキレイの役は？」

「そこが思案どころ。」

「早く読みたいな、ねえさんの傑作。」

+

ご飯をすませると、ユタカは、自分の机や本箱の中をきちんと整理しました。着物類にも手をつけようと思いましたが、マサに氣どられてはと思って、そのままにしておきました。

（とうさんが、早く帰ってくればいいな。さよならがしたい。こんなときに遺書というものを書く気になるんだろうな。）

マサは、また、テーブルをもち出して、おとぎ話を書きはじめました。

たれさがるおさげをときどき背にあげて、いっしんにペンを走らせています。柱時計が、いやに大きな音で九時をうちました。

（じゃ、ねえさん。いつまでも元気でね。とうさん、だいじにして。）

ユタカは、手の甲で、ほおをふきながら、なにくわぬそぶりで、玄関の土間におりました。

「どこへ行くの？」

「そのへん——散歩してくる。」

「とうさんにあうかもしれないね。」

「あうと、いいなあ。」

(ねえさんにも、こんなうそをいってしまった。火のカムイ(神)にたのもうか。ぼくは許しても
らえないだろう。カムイにも、見はなされてしまうかもしれない。地獄行きだ、まっさかさまにつ
きおとされて。あいつもいっしょだ、ゴンのやつ。)

クルミの幹にさわりながら、上を見あげると、どの枝も、まじめな姿勢をしていました。

(クルミ先生、さよなら。)

もう一ど窓から家の中をそっとのぞくと、マサは、くり色のセーターで、おさげ髪をたらし、
さっきと同じ姿で書きつづけていました。

(ねえさん、さようなら。)

ユタカが、コタン道路へ出て、ふりかえっていると、ロンが、風のように、さっさと前を走って
いきます。

(ロンもつれていこうかしら。ロンをけしかければ、ゴンぐらい、いっぺんにおしたおすだろう。
でも、ひとり試合だ。)

「ロン、ロン。」

ロンは、あともどりしてきました。ユタカはしゃがんで、ロンの背なかをさすって、

「さ、帰れ。」

ロンは前足をついてすわったまま、動きませんでした。

ユタカは、ゆっくりとカラマツ林の方へ出かけました。月は、もう白っぽくなり、真綿雲の間をゆっくり歩いていました。

人かげが見えてきました。(とうさん。)ユタカはそう感じて立ちどまり、近づくのを待ちました。ユタカが、そばによって行って、

「とうさん。」

と、声をかけました。

イオンは、うつむきかげんのからだを、ぐんとまっすぐのばして、

「ユタカか。さ、いっしょに、帰ろう。よく迎えに来てくれたな。」

酒くさい息をはきかけて、ユタカと肩を組みました。

(途中までもどっていいこうか。ここでわかれてしまおうか。いっしょに歩けば、そのままひきずられていきそうな気がする。思いきりよく、ここでわかれよう。)

「とうさん、ぼく、ちょっと出かけてくる。」

「なに? どこへ行くんだ、いまごろ。さ、うちへ帰るんだ。マサが待ってるでな。」

「でも、約束があるんだもの。」

「約束? じゃ、行ってこい。うそつきになるからな。うそだけは、とうさん、ついたことはないぞ。」

「——」。

「正直者はころりとまいる。まいってもいい。な、きょうは、おまえの大すきなもの、おみやげ持ってきたんだ。これ、これ。」

イオンは、右手のふろしき包みをふりながら、さしあげました。

「なに？」

「いや、いや、いわんよ。おまえもいっしょに帰ったらな、そこで、これを、ぱっとあける。おまえが喜ぶ。マサも喜ぶ。かあさんも、——あ、かあさんは、いなかったな。」

「とうさん、だいじょうぶかい？　ひとりで。」

「だいじょうぶだとも。ほら、目をつむっても、このとおり歩けるよ。」

「とうさん、気をつけてね。そのへんにロンが待っているよ。」

「ロンか。ロンさん、ロンさん、どこ行くの、か。」

イオンは、ごきげんさんで、月光を背にあびて、ふらりふらりコタン道路を帰っていきました。後ろ姿を見送っていると、両足が地べたにすいついて、動かなくなりそうでした。

ユタカは、あわてて、せわしく足ぶみを二、三どしました。

イオンのふろしき包みの中には、タルガキが、三つはいていたのでした。タルガキは、イオンの妻がなによりの好物でした。それにいたのか、ユタカもマサも、目のないほどすきでした。タルガキの季節になると、イオンはその初ものを、むりをしてでも買うのがたのしみでした。